

主旨説明

「ハーストにとって問題なのは、フォーディズム(ケインズ主義的福祉国家)や、国家社会主義の衰退以降、ネオ・リベラリズムが大きな潮流になっているにもかかわらず、それに有効に対抗するプロジェクトが生まれていないということである」。篠田武司(立命館大学、経済学)は山口定他編『新しい公共性-そのフロンティア-』(有斐閣、2003)の中で、英国の政治学者ハーストを論じてこのように述べています。しかし、そもそも「第三の道」はこのような「プロジェクト」として登場してきたのではなかったのでしょうか。

今年のシンポジウムはゲストに Sharon Gewirtz さん(ロンドン・キングスカレッジ)と気鋭の英国政治学者、近藤康史さん(筑波大学、著書に『左派の挑戦—理論的刷新からニュー・レイバーへ—』(木鐸社、2001))をお迎えしました。そして「第三の道」という広い枠組みの中の一分野として教育政策を考えたいと思っています。具体的には、近藤さんには、「第三の道」との関わりにおいて、ニュー・レイバーの理念、政策一般について語っていただき、ゲワーツさんにはその理念、政策を教育に引きつけて論じていただこうというような構想を練っています。そして、もうお一方、本学会の会員の中からもパネリストをお願いしたいとも考えています。

日本の政治状況や教育政策も視野に入れながら、議論ができれば幸いです。

(企画: 谷川至孝会員)